

韓国社史・地誌の宝庫（アジ研図書館を使い倒す 第10回）

著者	中川 雅彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	217
ページ	55-55
発行年	2013-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045549

韓国社史・地誌の宝庫

中川雅彦

アジ研図書館はとりわけ、韓国の社史や地誌が揃っている。二〇〇九年三月にアジ研図書館の資料展「韓国の社史」が開かれた。この案内には次のように書かれている。

「韓国社史の収集は韓国の経済発展や企業研究のための資料として研究者の協力のもと一九九〇年代半ばから始められました。これらの資料は非売品のため入手が難しく、現地の古本屋や韓国書籍代理店を通じて継続収集に努めてきました。現在当図書館では、財閥や製造業、金融機関、新聞社などを中心に約六〇〇冊の韓国社史を所蔵しています。」

この最初の部分をもう少し詳しく説明しよう。一九九七年のある日、当時アジ研海外派遣員としてソウルにいたわたしは、市の中心部に位置する仁寺洞道に沿った「承文閣」という古書店を訪問した。この店は日本の朝鮮史研究者の間では有名である。主人は一九六二年に店を構えたが、政財界の偉い人が引越しをするときに蔵書を引き取るといったことから、ゴミ捨て場に行つて本を探すことまでしてきたそうである。

一九九七年は韓国の多くの人々にとって悪夢の年であった。財閥企業の倒産、株価の暴落で大変な状態となり、韓国ウォンが暴落して国際通貨基金から融資を受けるほどであった。この主人は少なからぬお金を投資信託で運用してい

たようであり、かなりきつい目にあつたらしい。一方のわたしは、日本円でわたされる調査費（研究活動のための費用）が韓国ウォンでいきなり二倍以上に膨れ上がっていた。ふと、書棚の上のほうに気がなつて、梯子を借りて上がつてみた。本を手にとると、獲物を狙う猛獣のような目がこつちを見ていた。

「社史に興味があるのかい？」
「いやあ、うちの図書館に置いてあつたらいいなと思つて。」

主人は、これだ、とばかりに机の奥から紙を引つ張り出してきた。

「うちにある社史の目録だ。〇〇さん（アジ研OB、当時は大学教授）に頼まれて作つたんだが、何年も音沙汰ないからあなたにやるよ。」
そのときから、わたしの調査費の大部分はアジ研図書館に入る社史、地誌の購入に当てられ、承文閣の売上げに変わっていった。

そして帰国後数年間、味を占めた承文閣から社史と地誌の目録がせつせとわたしのところに送られてきた。わたしはときどきアジ研図書館に購入してもらうよう手続きをとつた。何年も前から客に繰り返し店をたたむと言つていた承文閣は息を吹き返したようである。不便だからFAXを備えてくれと言つても、電話と郵便しか使わなかつた承文閣は、後にインターネット販売をやるようになった。

社史や地誌を売り尽くしたらしく、承文閣はわたしのところに目録を送つて来なくなつた。代わりに、アジ研図書館が社史や地誌を収集していると知つた別の業者たちが直接目録を送るようになったので、もう私の出番はなくなつた。こうしてアジ研図書館では朝鮮語書籍のパートのなかでとくに社史と地誌が充実していったのである。

使う側に回つたわたしは社史よりも地誌を見ることが多い。朝鮮半島の主に北側の政治経済動向をみる筆者としては、ソウルで出された北朝鮮の地誌が結構役に立っている。それらは、北朝鮮出身者たちがそれぞれ出身地ごとに組織した「道民会」などで編纂されたものであり、南北分断以前の北朝鮮地域の様子がよくわかるようになつている。また、アジ研図書館では、植民地時代の朝鮮地図を閲覧することができ

る。この時代の地図には地名の漢字表記のみならずカタカナで現地での読み方が記載されており、各地の状況を知るうえで手がかりになることも多い。たとえば、今の行政区画にはない地名が工場名や駅名として残っている場合がたまにあり、こうした資料を見比べることによつて工場の位置を特定できたりもする。

もちろんアジ研図書館は古書店にあるものばかりを集めているわけではない。平壤でも各地の地誌に関する調査研究が行われてきており、そうした成果も収集されている。韓国側の地誌だつて相当な数である。
（なががわ まさひこ／地域研究センター動向分析研究グループ長）